

新学術領域研究「神経系の動作原理を明らかにするためのシステム分子行動学」

若手研究者海外派遣プログラム報告書

京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニット江島グループ 特定研究員 橘真一郎

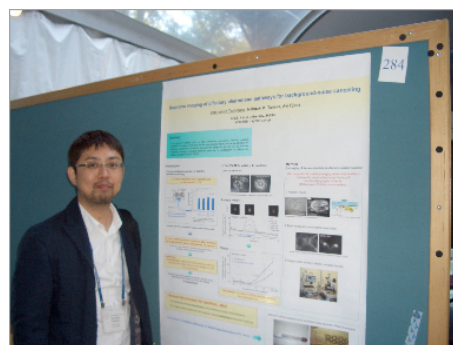
出張先：14th Neurobiology of *Drosophila* meeting

アメリカ合衆国ニューヨーク州、コールド・スプリング・ハーバー研究所

この度、若手研究者海外派遣プログラムの助成により、**Neurobiology of *Drosophila* meeting** に参加させて頂きました。マンハッタンから電車と車を利用して1時間程で辿り着く、**meeting** の開催場所であるコールド・スプリング・ハーバー研究所は、周りを森に囲まれ、敷地内にある内湾にヨットが佇むとても閑静な場所にあります。また同研究所は生物学における著名な研究者が多数在籍していたことでも知られています。講演会場には、所長を務められたワトソン博士らがノーベル賞を受賞するきっかけとなった発見であるDNA二重らせん構造を模したオブジェが置かれており、初めてこの場所を訪れた私にはとても感慨深いものがありました。

この **meeting** には、その名が示しているように、ショウジョウバエを対象に神経科学に関する研究を行っている研究者が一堂に会します。そして5日間、連日朝9時から夜10時過ぎまで発表を聴き、宿泊先との間をシャトルバスで送迎してもらうという合宿のような形で行われます。今回の **meeting** には469名の参加者があり、81題の口頭発表と279題のポスター発表が行われました。この **meeting** は論文発表に至っていないような最新データを発表し、互いにどのようなことを行っているのか情報交換する場と考えられているようで、発表内容はそのような意向を反映した現在進行中のものばかりでしたが、どれも論文として発表する寸前まで進んでいるような充実した内容でした。口頭発表終了後の質疑応答は座長がタイムアップで打ち切るまで続き、ポスター発表では発表会場全般にわたり、設定された時間を超えて議論が続いているような盛況ぶりで、同じ分野の研究者が一堂に会する利点が良く現れているように思いました。また、この **meeting** は私がこれまでに参加した学会の中で最も高い熱気を帯びており、この研究分野の勢いを感じました。

私自身は8ヶ月前に現所属グループに加わるまで、ショウジョウバエを扱ったことも神経科学分野に携わったこともありませんでした。そのため、まだこの研究分野の潮流を掴みきれておらず、得ている実験データもあまりないという、防寒具を備えずに吹雪の中に飛び込むような状態で今回の **meeting** に臨みました。その結果、発表者の発表内容を追いきれなかったり、自身のポスター発表の際に実験結果が示す生物学的意義をうまく説明できなかったりと、凍えるような手痛い思いをしました。



しかしながら、私のポスター発表にも時間いっぱいまで多くの方が訪れてくれ、多くの質問や助言をくださいました。他機関の研究者の方々から色々な話をいただけたことは、まだ走り始めたばかりの自身の研究の方向性を確認・修正する上でとても意味のあるものでした。また、このようなタイミングでこの研究分野の雰囲気を実感できたことも、新規参入者である私にとってはとても有意義なことでした。

今回の **meeting** における数々の貴重な体験は、新学術領域研究「神経系の動作原理を明らかにするためのシステム分子行動学」の研究代表者である東京大学大学院理学系研究科の飯野雄一教授、ならびに領域事務担当の石澤和子様のご支援によって得られたものです。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。